

Title	なぜ日本に組織神学が必要なのか（共同研究報告：組織神学研究センター連続講座）
Author(s)	野口，日字満
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.18-No.2, 2008.9：19-20
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=4780
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

研究センター連続講座が開催された。今回は、聖学院大学総合研究所教授の深井智朗氏に表記のテーマに基づいてお話をいただいた。概要は以下の通りである。

これまでの日本における神学研究の主流は、欧米で流行している神学の紹介に過ぎないという傾向にあった。しかし欧米と違い組織神学の社会的市場が確立していない日本で組織神学を営むことは、必然的に「なぜ日本において組織神学が必要なのか」という前提に答えなければならないことになる。ただしそのことが早急に「もう欧米から学ぶものは何もない」という意味での神学的主体の確立を結論づけるとするならば、神学における鎖国主義の再来となってしまう。必要なことは、欧米、そしてもちろんアジアにおける神学研究の成果から学びつつも、それを取捨選択して自らの日本における神学の研究に用いることができる神学的主体と判断基準を確立する、ということである。

神学の場合は教会であるゆえに、神学と教会との関係が考えられなければならない。シュライマハーは、それを教会が形作られる程度に応じて神学が構築されると言い表した。すなわち神学が教会を生み出したのではなく、教会が神学を必要としたのである。しかし日本におけるキリスト教の歴史は、教会が教派的伝統からあまりにも早く切り離されてしまったことにより、教会や神学が何であるかというごく初歩的な問題の学習や教会の形成なしのキリスト教を可能にしてしまった。個々の神学者や教会の指導者の個人的な宗教経験や思想的な背景が日本における「神学」になってしまっている可能性がある。そのために神学も教会も次に継承できないのである。このような状況の中で、ひとは「なぜ日本において組織神学が必要なのか」という問いと直面する。それが日本における組織神学の営みの開始でなければならない。

そこで二つの問いを考えてみる。一つ目の問いは、なぜ日本人が他民族の神を受け入れ、それを

【組織神学研究センター連続講座】
なぜ日本に組織神学が必要なのか

2008年5月20日、聖学院生涯学習センター2階において、30名の参加者の下、「なぜ日本に神学が必要なのか」を総主題とする第1回組織神学

真の神と呼ぶのかという問いである。ひとが「なにゆえキリスト者となるのか」という問いに答えてキリスト者となるのは、イスラエルを選んだ神とイエス・キリストが指し示した神とが唯一の神であることが真実であることが明らかになる時である。そのことが、日本人がなぜキリスト者になるのか、という問いへの答えであり、そのことに答えるための奉仕が組織神学に求められる。この問いに答える組織神学は、一方でこの神がユダヤ民族の神であるだけでなく、全人類の神であるという信仰から来る包括性と普遍性を持つことになる。

二つ目の問題は、組織神学と終末論との関係である。組織神学が生み出した終末論、あるいは終末の現実という考え方は、組織神学を、神学に対する通俗的な解釈と、また神学内部における神学を教会の内部の真理性問題に限定する、悪い意味での神学の主観的信仰告白化やドグマティズムへと還元してしまうことを拒否することになる。むしろ神学は、現在と黙示文学が設定するような終末との間の「中間時」においてその機能を果たすことが期待されている点に注目すべきであろう。つまり組織神学は、歴史的将来に対して開かれているのである。

以上が今回の講演の概要である。質疑応答においては、真理の相対化が強く主張される現代において、いかにして自らを絶対視することなくキリスト教の真理を示すことができるのかといった現代の日本に生きるキリスト者が直面する課題をめぐって、活発な議論がなされた。

(文責：野口日宇満 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科 博士後期課程)

(2008年5月20日、聖学院生涯学習センター)